実践報告

保育・介護現場に生かすクリニカルアートに関する実践研究

牛丸　和人

（西九大学短期大学部　幼児保育学科）

（令和 3 年 12 月 15 日受理）

The Action-Training-Research about the Clinical art Utilized for Nurture and Nursing

Kazuto USHIMARU

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted December 15, 2021)

Abstract

This thesis introduces the practice to utilize clinical fine arts by nurture and nursing care welfare. Theory learning and a workshop of clinical fine arts are practiced by this study.

The purpose of this study is that students aiming at bodily injury aid work improve the support power while using art. Bodily injury aid work is mainly nurture people, kindergarten teachers and nursing people. This action-training-research can expect to contribute to utilization of clinical fine arts in a site of nurture, education and nursing big from now on.

Key words:　臨床美術・クリニカルアート　clinical art
介護福祉　nursing care welfare
認知症予防　dementia prevention
自尊感情の醸成　fostering self-esteem

1　研究実践の目的

クリニカルアート（臨床美術）の理論学習やワークショップの実践による対人援助職（保育士･幼稚園教諭･介護士等）を目指す学生のアートを通した支援力の向上･クリニカルアートの保育現場や教育現場、介護現場への普及に向けた基盤づくり

2　研究の特色（位置づけ）

⑴　クリニカルアート（臨床美術）とは

今回、実践研究に取り組むクリニカルアート（臨床美術）は、技法指導を重視した造形活動ではなく、導入から制作、そしてシェアリングまでがプログラミングされた造形活動である。具体的には「右脳」を活性化させるような教材を精選したり、カウンセリングマインドを基本においた言葉かけ（コミュニケーション）を行ったり、制作後のシェアリング（分かち合い）を工夫したりすることによって自尊感情、自己存在感を高めるための造形活動を指す。クリニカルアートは、高齢者の認知症の予防や症状悪化の遅延、そして子どもから成人、高齢者までの感性の醸成や自尊感情の醸成にも効果が期待され近年我が国でも注目され始めている。

わが国におけるクリニカルアートは、認知症に悩む人たちをアートで救うという目的で彫刻家の金子健二[1)]が実践研究に取り組んだのが始まりである。もともと金子氏は1977年に造形教室を設立し、当初はアートの力で子どもから高齢者の「右脳」を活性化し心を開放することを目的として活動を展開していた。そのような中で、日本国内では認知症に対する関心が高まり始め、1996年、氏は認知症発症者に対する造形活動に取り組み始めた。当初は、絵画やオブジェなどの造形活動を通した「右脳への刺激」が認知症の症状改善につながるという仮説による造形プログラムであった。この造形活動は徐々に医療と福祉の分野において注目され、理解者と賛同者が急速に広がっていった。1999年には認知症患者診療の先進病院であった「国立精神･神経センター武蔵病院（現在の国立精神・神経医療研究センター病院）」において、認知症リハビリテーションの一環として導入されるまでに至った。これを機に翌年の2000年に日本臨床美術協会が設立され、これを機に東北福祉大学、東京藝術大学、京都造形芸術大学など多くの大学が臨床美術士の養成に関する取り組みを始めている。そして、認知症の予防や進行の遅延に対する効果だけでなく、保育現場や教育現場における発達障害の傾向がみられる子どもたちのケアや、社会人向けのメンタルヘルスケアにも広く取り入れられるようになってきている。東日本大震災の際には被災者の心のケアのためのクリニカルアートのワークショップも開催された。このようにクリニカルアートは「認知症の予防」「発達が気になる子どもへのアプローチ」「社会人向けのメンタルヘルス」等、美術・福祉・医療・教育の現場における画期的な造形活動として注目され、活用され始めている。

クリニカルアートと混同される言葉にクリエイティブ・アートセラピー（Creative Arts Therapy）がある。これは主としてアメリカやヨーロッパにおける精神医療において研究されてきた精神的なケアにアートを用いる心理療法である。心理的な病気や悩みを持った人へのカウンセリングや、様々な障害を持つ人への治療（作業療法）の手段として使われてきた造形活動で近年は治療目的だけではなく、健康な人の不安解消のための療法としても利用されている。そこでは造形活動自体を楽しむというよりも、作品制作の過程や感性作品からクライアントの心理状態を分析したり、それをもとにカウンセリングを行ったりするという心理学的アプローチが重要視されている。その点が右脳の活性化を図るプログラムによって造形活動を楽しませ、右脳の活性化を促したり、指導者による言葉かけや参加者相互のシェアリング等によって自己存在感を高合ったりすることを目的とするクリニカルアートとは異なるところである。

⑵　図画・工作科、美術科における教科としての実践研究との違い

本学の幼児保育学科では新入生を対象に「図工、美術に関するアンケート調査」を行っているが、ここ五年間の結果では､毎年60％から70％の学生が表現活動を「苦手（きらい）」「どちらかといえば苦手（きらい）」と答えている。その理由を問うと、早い者は幼児期から作品を評価され、保育士や保護者に写実的な表現技術を強要されたり、大人の感覚で絵に加筆されたりしたという経験をしている者が少なくない。また、小学校における図画・工作の授業や中学校、高等学校における美術の授業においては、教科としての造形活動が評価の対象という理由から、一部の学生を除いて作品を他者と比較されたことによるコンプレックスが生じたと答えている。その他、個々の児童生徒の感性を大切にするというよりも表現技法の指導が重んじられたり、各種コンクールへの入選や入賞に向けての作品作りが強要されたりしたことによって造形表現への興味・関心が薄れてしまったという学生もいた。幼児期の造形遊びの段階から美術教育に至るまでの間、繰り返しこのような指導方法が行われてきたことも､本来自由であるべき造形表現への「苦手意識」を生み出してしまっていると筆者はとらえている。保育園や幼稚園、そして学校教育において生じた「表現活動への苦手意識」は卒業後も継続してしまい、生涯においてアートと関わり表現する喜びを味わったり、作品を通

して自己存在感を高めたりしたいという意欲にはつながりにくくなっていると感じるのである。本学で開催されている高齢者を対象とした「生きがいづくり」という講座において実施したアンケート調査にも「表現活動が苦手である」という回答が60％を越えた。この苦手意識の払拭もクリニカルアートの目的の一つでもある。

今回の実践研究ではクリニカルアートを学生たちに体験させることで、造形活動による対人支援力を身につけさせると共に、クリニカルアートの保育現場や介護現場への普及に向けた基盤づくりにつなげたいと考えている。

⑶　期待される成果

今回の研究実践においては以下のことが成果として期待される。

⑴　対人援助職を目指す学生たちにとって、クリニカルアートが子ども達や要介護にある高齢者等の「心を開放する手段」「自己存在感を高める手段」として活用できるという意識が高まる。

⑵　将来、臨床美術士の資格を取得しようという意欲が高まる。

⑶　造形活動も活用しながら地域社会に貢献していこうという心情が醸成される。

３．実践研究の実際

⑴　保育士・幼稚園教諭を目指す学生に対するワークショップ

・実施日：令和３年５月28日㈮

・対　象：西九州大学短期大学部
　　幼児保育学科牛丸ゼミ（10名）

・プログラム名：クロッキーパズル

このプログラムは、オイルパステルで画面上に無作為に打った10個程度の複数の点を線で結び、偶然にできた形をモダンテクニックの技法で埋めていく造形遊びである。

◆アンケート結果（回答者数10名）

「保育に生かせるクリニカルアートに対してどう感じましたか？」

①　とても興味をもった　　（10名）100％
②　どちらかといえばもった（0名）　0％
③　あまりもたなかった　　（0名）　0％
④　全くもたなかった　　（0名）　0％

○参加者の感想から
・造形作品の優劣を比較しないという指導者のスタンスに非常に共感した。
・保護者の日頃の言葉かけを振り返らせるきっかけになると思った。
・アートが自尊感情を高めるためのツールになるということに興味をもった。

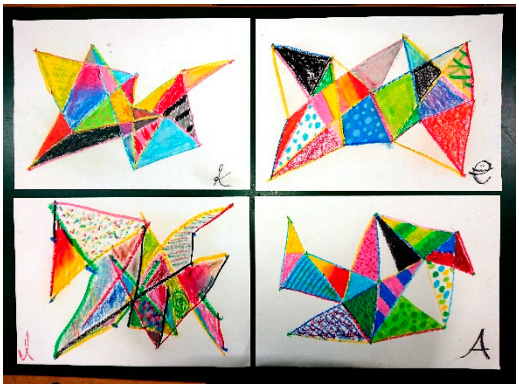

図１　クロッキーパズル作品

⑵　介護士を目指す学生に対するワークショップ

・実施日：令和３年７月２日㈮

・対　象：西九州大学短期大学部地域生活支援学科
　　介護福祉コース・学内実習
　　（１年生16名・２年生21名 計37名）

・プログラム名：和紙で野菜をつくろう

このプログラムは新聞紙とマスキングテープの上に和紙を貼り付けて野菜を作るという造形遊びである。

◆アンケート結果（回答者数37名）

「クリニカルアートを介護の現場でも生かしてみたいと思いますか」

①　ぜひ生かしてみたい（31名）84％
②　どちらかといえば　　（6名）16％
③　あまりそう思わない（0名）　0％
④　全くそう思わない　　（0名）　0％

○参加者の感想から
・入所者に自己存在感を感じさせるために利用してみたい。
・新しいスキルを学んだ。利用者と一緒に作りたいと思った。（留学生）
・作品をほめることで利用者を認めることにもつながると分かった。

図２　和紙かぼちゃ作品（タイプＡ）

⑶　保育士を目指す高校生に対するワークショップ

・実施日：令和３年 10 月 30 日㈯
・対　象：佐賀清和高校３年生（16 名）
・プログラム名：ハンドペインティング

このプログラムは、片手に水彩絵具で抽象的な模様を描き画用紙にスタンプし、切り取り色画用紙に貼るという造形遊びである。

◆アンケート結果（回答者数 16 名）

「保育に生かせるクリニカルアートに対して興味をもちましたか？」

①　とても興味をもった　　（14 名）88%
②　どちらかといえばもった（２名）12%
③　あまりもたなかった　　（０名）　0%
④　全くもたなかった　　（０名）　0%

○参加者の感想から
・とても楽しい。子どもに対する話しかけ方や言葉選び等も、とても勉強になった。
・「上手だね」以外の誉め言葉を探していきたいと感じた。
・これまでの授業では体験できなかったことで楽しかった。違う視点から見ることの大事さにも気づかされた。

図３　ハンドペインティング作品

⑷　精神科医療を学ぶ学生に対するワークショップ

・実施日：令和３年 10 月 14 日㈭
・対　象：西九州大学健康福祉学部
　　社会福祉学科学生（12 名）
・プログラム名：思い出の空

このプログラムは、湿らせた画用紙に水彩絵具の三原色を置き、混色したり、新しい色を加えたりしながら、抽象的な画面を作り上げていく造形遊びである。

◆アンケート結果（回答者数 12 名）

「保育に生かせるクリニカルアートに対してどう感じましたか？」

①　とても興味をもった　　（10 名）83%
②　どちらかといえばもった（２名）17%
③　あまりもたなかった　　（０名）　0%
④　全くもたなかった　　（０名）　0%

○参加者の感想から
・造形活動を通してクライエントとの対話を楽しむことができるメリットに気づかされた。
・精神科の分野にも活かせることが分かった。活用してみたい。
・就職先でも生かしてみたい。

図４　思い出の空

⑸　免許状更新講習を受講した幼稚園教諭に対するワークショップ

・実施日：令和３年８月 18 日㈬
・対　象：免許状更新講習幼稚園教諭（23 名）
・プログラム名：和紙で野菜を創ろう

このプログラムは新聞紙とマスキングテープで作った土台にのりで和紙を重ね貼りしながら野菜を作る造形遊びである。

◆アンケート結果（回答者数 23 名）

「クリニカルアートを保育現場における造形遊びに、取り入れてみようという意欲は高まりましたか」

①　とても思う　　（19 名）83%
②　どちらかといえば思う（４名）17%
③　あまり思わない　　（０名）　0%
④　全くそう思わない　　（０名）　0%

○参加者の感想から
・造形活動におけるの言葉かけの工夫や考える時間の確保、共感することの大切さに気づかされた。
・個々の作品を大切にしながら自尊心を育んでいきたい。
・保育補助として働いている。クリニカルアートや関わり方を生かしたい。

図５　和紙かぼちゃ
（タイプＢ）

４．実践研究の成果と課題

今回は、留学生を含む本学の学生たちに加え、対人援助職をめざす西九州大学健康福祉学部の学生、清和高等学校の生徒､保育現場に現在勤務している幼稚園教諭等、人援助職に関係する人材に幅広くクリニカルアートを体験させることができた。

それぞれのワークショップ後に実施したアンケートの結果からは、クリニカルアートが子ども達や要介護にある高齢者等の「心を開放する手段」「自己存在感を高める手段」として活用できることに気づいたり、実際に活用したりしてみたいという回答が100％であった。また自由記述の感想からは「作品の優劣を評価することで苦手意識を生まないように配慮した」「作品への共感は、作者の自尊感情を高めることにもつながるということを知った」等、造形活動と自尊感情との関連性について述べたものが多くみられた。また、クリニカルアートを保育現場や介護現場に効果的に取り入れながら、子ども達や入所者の自尊感情を高めたり、認知症の予防や進行の遅延に生かしたりすることで、社会に貢献したいと答えた学生も複数名おり、期待した効果は確実にみられた。

今回のアンケート結果からは、将来臨床美術士の資格を取得しようという意欲が高まっているか否かということまでは把握することはできなかった。今後は研究実践の深化を図りながら、臨床美術士の資格の取得に関する情報も与えることで、リーダーとして現場で活躍できる人材を育成していきたい。

図６　制作の様子（佐賀清和高校生）

図７　制作の様子（本短大学生）

図８　制作の様子（西九州大学学生）

脚注

1）金子　健二（かねこ　けんじ）
1948年宮城県生まれ。彫刻家。株式会社芸術造形研究所代表取締役。1976年東京芸術大学大学院彫刻専攻修了。1996年臨床美術を独自で開発。

参考文献

1）宇野正威・芸術造形研究所　2013 臨床美術認知症医療と芸術のコラボレーション　（金剛出版）
2）金子健二　2018　臨床美術　認知症治療としてのアートセラピー　（日本地域社会研究所）